

令和2年10月号

◆荒井類 選

《「何?」「どんな女性?」と思わせられて》

母ほどの齢の水着見てしまふ 白濱一羊

白濱一羊は昭和三十三年（一九五八年）生まれ。この句は平成十九年（二〇〇七年）発行の第一句集『喝采』所載。「齢」は「よはひ」＝年齢。つまり、掲句は作者が四十代（たぶん）に詠まれたもので、母ほどの年齢の人（女性）は、少なくとも六〇代以上であろう。

花筵人魚のごとく座りゐる 一羊

こういう妙齢の女性の横座りを見たいと思うのは男の性（さが）だが、こうして一句にされると滑稽さが醸し出される。

たかりたるものの形に蠅の群 一羊

疎ましきかの香水の近づき来 一羊

「これはなんだかわかりますか」と作者が問いかける。う～ん、と想像させられて、種明かしをされたら結構ショッキングで、そこに滑稽が生まれる。例えばショートケーキの形にたかっている蠅と想像するとおぞましいが、そういう不気味さもコミコミで滑稽。近づき来る「疎ましき香水」の女性はどんな人？ と想像したら、作者の思うつぼ。《ユーモアの価値を示す句》

気をつけて死んで下さい春隣 山崎十死生

掲句は、坪内揆典『口誦と片言』（五柳書院、一九九〇年刊）に紹介されている句。坪内は言う。「〈春隣〉は、春がすぐそこまで来ている感じを言う季語。

その時期はいわゆる季節のかわりめで、春を待つことができずに死者となる人が多い。山崎のこの句は、そうした時期を捉えて、皮肉とユーモアをとばしたものだが、ニヤリとしてうなずいてしまう面白さがある。こうした諧謔は、短かい詩においてことに力を発揮する。ところが、近代の文学があらかたそうであったように、俳句もまた、近代ではひた

---

すらまじめである。諧謔とかユーモアを一段低く見下げる気配があった。諧謔やユーモアは、言葉の仕掛けで楽しくも幅広くもすること、そのことをこの句は示しているようだ。

引用が長くなったが、さすがは坪内捻典と思わせる叙述である。蛇足ながら補足すると、坪内のいう「近代」は「明治時代以降」ということだ。

春隣闇がふくらみ来たるなり 柴田白葉女

河馬あくび河馬の子あくび春隣 河野美奇

河野美奇のこの句は「春隣」という季語を本意（ほい・ほんい）通りに使っていて、ユーモラスな景を切り取っている。（右の二句はWEB「俳句季語一覧ナビ」より）。

《滑稽俳句大賞受賞作より》

杖突いて杖つくさくら訪ねけり 飛田正勝

「杖つくさくら」とは、樹木医に支えの杖を与えられた老木の桜の木だ。登場人物は、「杖突いて」いる自分と、桜に杖を与えた（年配者だろう）樹木医、そして桜の老木（「杖つくさくら」も人間扱いとする）である。

これは、「杖突いて」いる自分）を自嘲的に詠んだ句ではない。自嘲が笑いを誘うという方針で自嘲の句を詠む方もいらっしゃるようだが、それだけでは深い笑いにはならないだろう。

杖をつきながら、誇り高くそこにいる（そして花を咲かせる）「さくら」。樹木医としての誇りをもって仕事をしている年配者。そして、やはり誇りをもって「杖突いて」いる自分）。この三者が出会ったとき、そこに滑稽が生まれる。質の高い笑いが生まれる。（掲句は第二回滑稽俳句大賞受賞作）。

次の句は、「ふ」の字のかたちで歩いている動物はなあに？ というクイズの答のような俳句といえようか。

ペンギンは「ふ」の字のかたち日脚伸ぶ 久我正明

ハハハ、ペンギンの群れが歩いているのを見ると、確かに「ふふふ」が歩いているようだ。「日脚伸ぶ」という季語もいいと思う。（第八回滑稽俳句大賞十句のうち的一句）。この

句に接し、次の有名な一句を思い出した。

蛞蝓といふ字どこやら動き出す 後藤比奈夫

うん、「蛞蝓（なめくじ）」という字を眺めていると確かに…。

海の字より母を連れ出す晩夏かな 佐藤成之

陽炎や母といふ字に水平線 鳥居真里子

母の字に泪の二滴鳥渡る 小澤克己

「ふ」の字のかたちにはペンギンを見る機知。海の字を用いたウイット。こういう字（文字）の形の喚起するイメージを用いても、滑稽俳句はつくれるということだ。

謹悼：後藤比奈夫氏は百三歳の天寿を全うされました（二〇二〇年六月五日）。謹んでご逝去をお悼み申し上げるとともに、氏のご冥福をお祈りします。

（文中敬称略）